

# Lokavyavahāra とは何か

—『聖無盡意經』に於ける世俗語解釋の轉換點—

## 赤 羽 律

### 0. はじめに

インド佛教中觀派における「二諦説」は、Nāgārjuna (ca. 150-250) の『中論』(Mūlamadhyamaka-kārikā: MMK) に説かれた二諦説の解釋を中心に發展してきた。Nāgārjuna 以降、中觀派を標榜する多くの論師達は、主に唯識派との議論を通じて自らの二諦説をより論理的破綻のないものへと深化させたが、特に Jñānagarbha (ca. 8c) は Dharmakīrti (ca. 600-660) の認識論を背景にそれまでの二諦説を纏め、『二諦分別論』(Satyadvayavibhāṅga-ṛtti: SDVV) を著作したのである。勿論、彼以降に登場する中觀派の論師達も二諦説に言及するが、何れも Jñānagarbha が SDVV において提示した二諦説の範疇を大きく書き換えることはなかった。それ故に、インド佛教中觀派における二諦説は SDVV によって一應の完成をみたと言えるであろう。

さて、そのように發展してきた二諦説を考察する際に留意すべきことは、ある二諦説を別の二諦説と単純に比較考察することではなく、どのように二諦説が整理され、纏められてきたのかというその流れを具体的な言及關係によって明らかにすることであろう。

本稿では、多くの論書に引用される『聖無盡意經』(Ārya-Akṣayamatīrdeśasūtra: ANS) 中の二諦説に言及する一節を採り上げ、それに對する各論書の理解を比較考察することで、二諦説がどのように解釋され、傳承されてきたのかその一端を明らかにしたい。

### 1. ANS に示される二諦説とその注釋

本稿の議論の中心となる ANS の當該の一節 (以下 [A]) は以下の通りである。

[A] de la kun rdzob kyi bden pa gañ ze na 'jig rten gyi tha sñad dañ / yi ge dañ / sgra dañ / brdas bstan pa ji sñed pa'o // don dam pa'i bden pa ni gañ la sems kyi rgyu ba med pa ste / yi ge lta ci smos // (ANS: p. 73 ll. 1-4).

そのうち、世俗語とは何かというなら、「\*lokavyavahāra ('jig rten gyi tha

sñad<sup>1)</sup>) と、文字 (yi ge, \*akṣara) ・術語 (sgra, \*śabda) ・記號<sup>2)</sup> (brda, \*saṃketa) によって説示されたもの全て」である。勝義諦とは、そこに於いて心の働きが存在しないものであるなら、文字は何をかいわんや<sup>3)</sup>。

この [A] の世俗語を巡り、各論書でその解釋に相違が見出されるのである。まず ANS の注釋書である『聖無盡意經注』(Ārya-Akṣayamatīrdeśasūtra-tīkā: ANST) を採り上げ、そこに示された理解を確認することから始めたい。この注釋書の著者は Vasubandhu であると伝えられているが、『唯識二十頌論』(Viṃśatikā Vijñaptimātratāsiddhi) 等を著作した著名な Vasubandhu とは別の唯識派の人物である可能性が指摘されている<sup>4)</sup>。また ANST に引用される文献の成立年代、及び Jñānagarbha との關係などから、およそ 6c 半ばから 7c 末までの約 1 世紀の間に著作されたという筆者の推定の下に議論を進める<sup>5)</sup>。さて、[A] の世俗語部分に關する ANST の注釋は次の通りである。

[ANST] (1) de la kun rdzob kyi bden pa bśad par bzed nas 'jig rten gyi tha sñad dañ / yi ge dañ / sgra dañ / brdas bstan pa ji sñed pa zes gsuñs te / ji sñed pa zes bya ba'i sgra thams cad dañ sbyar te / 'jig rten gyi tha sñad ji sñed pa dañ / yi ges bstan pa ji sñed pa dañ / sgras bstan pa ji sñed pa dañ / brdas bstan pa ji sñed pa zes bya bar sbyar ro // (2) ji sñed kyi sgra ni ji tsam yod pa'i don drañs te / 'jig rten gyi tha sñad ji tsam yod pa zes bya ba'i tha tshig go // (3) de la 'jig rten gyi tha sñad ni bstan pa'o // lhag ma rnams ni bśad pa ste / yi ge a dañ ka la sogs pa gsuñ rab kyi luñ dañ 'brel pa rnams so // sgra ni gsuñ rab kyi luñ dañ 'brel pa 'du byed mi rtag ces bya ba la sogs pa'i tshig gi rkañ pa rnams so //

- 1) 'jig rten gyi tha sñad については、本論の意圖に照らし、ひとまず lokavyavahāra という想定サンスクリットを挙げ、文脈に應じ「世間の慣習」「世間の言語表現」という譯語を當てる。
- 2) yi ge, sgra, brda の譯語に關しては他にも想定可能であるが、ANST の注、及び查續の指摘をふまえ本稿では一應このようにしておく。
- 3) [A] は二諦説の教證としてしばしば引用されるが、實際の ANS では、[A] は三諦説として説かれた一部であり、[A] の後に相諦 (tshan nid kyi bden pa) という三つ目の諦が挙げられている。
- 4) ANST 及びその著者に關しては Braarvig (1993a) CXVII 以下を参照。また ANST の名前は『デンカルマ目録』(Lalou (1953) p. 332, no. 536)、『パンタンマ目録』(川越 (2005) p. 38, no. 769) に既に見出される。ただし、著者名は兩目録に見出せない。
- 5) ANST には、年代確定の指標としての價值があると思われる「考察されない限り喜ばしいもの」(ma brtags na gcig tu dga' ba, \*avicāraikaramāṇīya) という表現が見出されることは注目に値する。(ANST: p. 275 n. 1)

brda ni don ston par nus śiñ khoñ du chud par nus pa'i tshig gi rkañ pa rnamso // (4) ji sñed ces bya ba'i tshig gis<sup>6)</sup> luñ 'ba' žig gi ma yin gyi / 'jig rten gyi yi<sup>7)</sup> ge dañ sgra la sogs pa ci tsam yod pa rnamso kyañ sdud de / de yañ yid kyi dañ ñag gi sgo nas ston pa rnam pa gñis so // de la yid kyis ston pa ni ji ltar brgya byin la yid kyis chos mñon par bśad pa dañ / de dag gis kyañ rañ gi the tshom yid la btags pa dañ / lan kyañ yid kyis tshigs su bcad pas glan no // mdo de dañ de dag las 'byuñ ba lta bu'o // ñag gis bstan pa ni tshig gi rig byed rnam pa sna tshogs ñan pa'i gañ zag rnamso kyi rna bar soñ ba rnamso // de dag gis ni mdor na 'di skad du / gdul bar bya ba'i sems can rnamso kyi dbañ du ji tsam du tha sñad brjod pa thams cad kun rdzob kyi bden pa yin no / žes bstan te / (ANST: pp. 269-70 n. 1)<sup>8)</sup>

(1) そのうち、世俗語を説明しようとして、『lokavyavahāra と、文字・術語・記號によって説示された限りのもの』と言う。『限りのもの (ji sñed pa)』という言葉は、全て (の要素) と結び付けられる。lokavyavahāra である限りのものと、文字 (\*akṣara) によって説示された限りのものと、術語 (\*śabda) によって説示された限りのものと、記號 (\*samketa) によって説示された限りのものと、と結び付けられる。(2) 『ji sñed』という言葉は、「存在する限りの (ji tsam yod pa)」という意味を導くのであり、「存在する限りの lokavyavahāra」という意味である。(3) そのうち『lokavyavahāra』とは説示されたものである。残りのもの (yi ge など) は説明であり、「文字」は、「あ (a)」や「か (ka)」など教説と関係するものである。「術語」は、教説と関係する「(諸) 行」や「無常」ということなど言葉の支分である。「記號」は、意味を説示し、理解させることが出来る言葉の支分である。(4) 『限りのもの』という言葉は、經典の (文字など) だけではなく、世間の人々の文字や術語など存在する限りのものも纏めており、それも心と言葉の点から、説示は二種である。その内「心による説示」とは、「心を通じてシャクラに法を明瞭に説く」、「彼らも自らの疑念を心の中で考察する」、「(その) 答えも心を通じて偈によって與えられる」と、其處此處の經典に説かれている如くである。「言葉による説示」とは、言葉の諸々の知識を聞く人々の耳に聞こえる事柄である。それらによって要約するなら、「教化されるべき有情達に準じて、あらん限り述べられた一切の言語表現が世俗語である」と説

6) gi in the text.

7) yig in the text.

8) テキストと譯中の (1)~(4) の番號は筆者が便宜的に付した。

示されている。

まず (1) に於いて ji sñed pa (限りのもの) という言葉を『lokavyavahāra』 「文字」「術語」「記號」全てと結びつけて解釋すべき旨が示されている。その後 (2) に於いてその言葉 (ji sñed) が「存在する限りの」という意味であるとし、(3) に於いて『lokavyavahāra』は説示されたもの、残りはそれを説明するものであるとして具體例が擧げられている。最後に (4) に於いて ji sñed を「存在する限りの」と解釋したことで、「世俗語である lokavyavahāra には、經典の言葉だけでなく世間一般の人々の言葉も含まれる」と述べられている。

以上のことから、ANST では、教化されるべき有情達のために、「文字」「術語」「記號」によって説示された一切の lokavyavahāra、即ち「世間の言語表現」こそが世俗語であると主張されていることが分かる。

## 2. Jñānagarbha と Śāntarakṣita による注釋

この ANST の解釋を下敷きに [A] を注釋したと考えられる人物が Jñānagarbha である。彼は SDVV に於いて [A] を引用、注釋しているが、その内容は上掲の [ANST] を踏まえている。さらに既に指摘されているように、Jñānagarbha の解釋は Śāntarakṣita の『中觀莊嚴論』(Madhyamakālamkāra-vṛtti: MAV) 中の [A] に對する注釋にも受け繼がれている<sup>9)</sup>。

[SDVV] (a) 'jig rten gyi tha sñad gdags pa ni 'jig rten gyi 'jug pa ste / śes pa dañ śes bya'i mtshan ñid yin gyi / rjod par byed pa'i mtshan ñid ni ma yin te / de ni 'og mas brjod pa'i phyir ro // (b) ji sñed ces bya ba'i tshig ni mtha' dag ces bya ba'i don to // (c) des na rnam par rtog pa med pa'i mñon sum gyi śes pas yoñs su bcad pa'i no bo'i dños po gzugs la sogs pa dañ bde ba la sogs par rig par grub pa rnamso ni kun rdzob kyi bden pa kho na yin no // (d) de ni 'og tu yañ sbyar bar bya'o // (e) de'i phyir mdo las 'byuñ ba dañ / yi ge dañ skad dañ brdas<sup>10)</sup> bstan pa gžan dag kyañ gzuñ no //<sup>11)</sup> (SDVV: p. 158 129-p. 159 14)

(a) lokavyavahāra の施設とは、世間の人々の活動であり、能知と所知とを特徴とするものであるが、言語<sup>12)</sup>を特徴とするものではない。何故なら、そ

9) 松本 (1987) pp. 112-3, 一郷 (1985) p. 206, 赤羽 (2006) を参照。

10) brda in the text.

11) [MAV] との一致点を考慮し、便宜的に (a)~(e) まで五つに分割した。

12) このチベット語は rjod par byed ba であり、本来ならば「能詮」とでも譯すべき表現である。ただし、對應する [MAV] では「所詮」(brjod pa) となっている。同じ文脈で主客が入れ替わるのは不自然であることから、兩者を含む表現として「言語」という譯語を用いた。梶山氏は [MAV] を譯す際、brjod pa を「ことば」

れ(言語を特徴とするもの)は、後者(文字・術語・記號によって説示されたもの)によって述べられているからである。(b)「ji sñed」という言葉は「全て」という意味である。(c) それ故に、無分別な直接知覚の知によって確定されることを本性とする色形などや樂など認識として成立している諸々のものは、世俗諦に他ならない。(d) それ(全て(ji sñed)という言葉)は後者(文字・術語・記號によって説示されたもの)にも適用されるべきである。(e) それ故に、(世俗諦を述べるものは)經典に出ているものと、文字と術語と記號による別の説示も含まれている。

[MAV] (a) sems can dañ snod kyi bdag ñid kyi 'jig rten myoñ bar bya ba dañ myoñ ba'i ño bo'i tshul 'dir 'jig rten gyi tha sñad du dgoñs pa ste / byed pa'i sgrub pa yoñs su bzuñ ba'i phyir ro / brjod pa'i ño bo ni ma yin te / de ni yi ge la sogs pas brjod pa'i phyir ro // (b) ji sñed pa zes bya ba ni ma lus pa'i don yin par bstan te / (c) de'i phyir rnam par mi rtog pa'i šes pas rtogs pa'i bdag ñid gzugs la sogs pa dañ / bde ba la sogs pa ni kun rdzob kyi bden pa ñid las mi 'da' o // (d) de'i rjes su 'brel pa'i phyir yi ge la sogs pa yañ sbyar ro // (e) de'i phyir luñ las byuñ ba dañ 'jig rten pa yañ bsdu ste / de ni yid kyi dañ nağ gi'o / dper na yid kyis brgya byin la chos mñon par bśad pa dañ / yid kyis tshigs su bcañ pa'i lan btab par de dañ de dag nas 'byuñ ba lta bu'o // (MAV: p. 206 ll. 1-11)

(a) 有情と自然環境とを本性とする世間の、直接経験されるものと直接経験するものとを本性とするあり方が、ここで「lokavyavahāra」として意圖されているのである。何故なら、(lokavyavahāraには)作用の成就が含まれているからである。(lokavyavahāraは)言語を本性とするものではない。何故ならそれ(言語を本性とするもの)は「文字」などによって述べられているからである。(b)「ji sñed pa」とは「あまりなき」という意味であると説示されている。(c) それ故に、無分別知によって認識されることを本性とする色形などや樂などは、世俗諦を逸脱するものではない。(d) それ(ji sñed paという言葉)と関係しているから、「文字」などにも結び付けられる。(e) それ故に經典に出ているものと、世間のものも含まれる。それは「心の」と「言葉の」(二つ)である。例えば「心を通じてシャクラに法を説く」とか「心を通じて偈頌の答えを與える」と、其處此處に出ている如くである。

この兩者に於いて、ji sñed paという言葉を「全て」と解釋し、全要素に結びつける(b)、(d)の注釋はANSTの(1)、(2)と、さらには(e)の注釋もANSTの(4)と一致する。

と譯している。梶山(1995) p. 56 参照。

このようにSDVV, MAVによる注釋がANSTに影響を受けた可能性が見出される一方、全てがANSTと一致しているわけではない。既に確認したようにANSTに於いては、「文字云々によって説示されたもの」と「lokavyavahāra」を一塊として捉え、「lokavyavahāraとは言語表現である」と示されているのに對し、SDVVとMAVに於いては「lokavyavahāra」と「文字云々によって説示されたもの」を二つの異なった要素と捉え、「lokavyavahāraは無分別知とその對象を含む一切の認識活動の特徴とするもの、「文字云々によって説示されたもの」は言語表現を特徴とするものと示されているのである。

### 3. 唯識派による理解

實は[A]に關してこの二種類の理解が存在することは既に松本史朗氏によって指摘されている<sup>13)</sup>。同氏はこの二つの解釋を唯識派と中觀派との相違であると指摘し、[SDVV]や[MAV]を中觀派による理解の代表例として擧げる一方、唯識派の代表例も二つ擧げている。その内の一つが護法(Dharmapāla)の『大乘廣百論釋論』である。

又現量證緣起色心。言不能詮。應非俗諦。故契經說。所有世間名句所詮。名爲俗諦。(『大乘廣百論釋論』: T. 30 no. 1571, p. 247a6-7)

ここでDharmapālaは、直接知覚は言語表現されえず、世俗諦ではないという主張の教證として[A]の世俗諦部分を引用している。それ故に、Dharmapālaが有分別知とそれに付隨する言葉のみを「世俗諦」と考えていたことが間接的に理解される。一方Jñānagarbhaが先に擧げた[SDVV]の(c)に於いて「無分別な直接知覚の知とその對象も世俗諦である」と述べていることから、松本氏は「JñānagarbhaはSDVVに於いて有分別とそれに付隨する言葉のみを世俗諦であると考えていたDharmapālaの解釋を否定した」と主張し、これを唯識派と中觀派との世俗諦解釋の相違点である、と述べているのである。

松本氏が擧げるもう一つの例は、Kamalaśīlaの『中觀明』(Madhyamakāloka: MĀ)の前主張に引用される(恐らくは唯識説である)次の様な一節である。

[MĀ] bde ba la sogs pa(pa'i in P) so so(sor in P) rañ gis rig par bya ba gañ yin pa de dag kyañ gañ gi nañ du bsdu bar 'gyur / re žig kun rdzob tu ni ma yin te / de dag brjod du med pa'i phyir la / kun rdzob kyi bden pa ni tha sñad gdags par bya ba yin pa'i phyir ro // de skad du mdo las kun rdzob kyi bden pa gañ že na / 'jig rten gyi tha sñad ji sñed yi ge dañ sgras bstan pa yin no zes gsuñs te / 'dis ni mdor na kun rdzob

13) 松本(1987) pp. 128-9を参照。ただし、松本氏はANSTの解釋に關しては言及していない。

sgra'i don yin no zes bśad pa yin no // (MĀ D. sa 142a1-3, P. sa 153a6-8)

自内證される樂などは、(世俗と勝義のうち)どちらに含まれるものであろうか? まず世俗に於いてではない。何故ならそれらは述べられるものとして存在しないからであり、世俗諦とは言語表現が施設されるものだからである。そのように經典にも『世俗諦とは何か、というなら、文字や術語によって説示された世間の言語表現である限りのものである』と説かれており、それ故に要約するならば、世俗は言葉の対象であると説かれているのである。

ここで、自内證(直接知覚)の対象は言語表現されず世俗諦ではない、という主張の教證として [A] が引用され「世俗は言葉の対象である」と述べられている。これは、確かに上掲の Dharmapāla の理解と一致する。さらに松本氏が指摘したこれら二つの例は、唯識派の人物が著作したと思われる ANST の「世俗諦とは言語表現である」という解釋とも一致しているのである。これらの例に基づく限り、松本氏の指摘どおり、唯識派が總じて [A] に示された世俗諦を言語表現であると理解していたと言えるであろう。

#### 4. Candrakīrti と Avalokitavratā による理解

一方で、Jñānagarbha, Śāntarakṣita 以外の中観派の論師はこの [A] の世俗諦に関してやはり Jñānagarbha などと同様の解釋をしているのだろうか。実は、今回調べた限りでは、Jñānagarbha 以前の中観派の論師で [A] の世俗諦部分を引用するのは Candrakīrti だけであった。彼は『空七十論注』(Śūnyatāsaptati-vṛtti: ŚSV) に於いて、[A] の世俗諦部分を引用した後、次の様に注釋している。

[ŚSV] (a) yañ na ci źig la 'dir 'jig rten gyi tha sñad ces bya źe na / de la re źig bud śiñ la brten nas me bźin du phuñ po la brten nas btags pa'i gañ zag la 'jig rten źes brjod do // de yañ phyin ci log dañ phyin ci ma log pa ñid kyis rnam pa gñis so // de la dbañ po ñams pa'i rab rib can la sogs pa phyin ci log yin la / phyin ci ma log pa ni dbañ po ma ñams pa rab rib can la sogs pa las gźan pa'o // 'di ñid kho na yañ 'dir 'jig rten pa'i sgras brjod kyi / cig śos ni ma yin te / 'jig rten pa kho na la rnam pa tshad ma ma yin pa'i phyir ro // (β) 'jig rten gyi tha sñad du gsuñs pa yañ gźan gyis<sup>14)</sup> khoñ du chud par 'dod pa'i dños po kun nas rtog[ls] pa'i dños po sna tshogs pa gźan gyi rgyud la rtogs pa 'jug par byed pa la tha sñad ces brjod do // 'jig rten pa'i tha sñad ni 'jig rten tha sñad de ji ltar 'jig rten pa rtogs par 'dod pa'i don phan tshun du rtogs par byed pa'am / śes par 'dod pa'i don khoñ du chud pa de bźin du don de la brjod bya rjod byed kyi 'brel pa

14) Erb 氏の校訂テキストでは gyi の讀みを採用。

dañ / śes bya śes byed du rnam par 'jog par byed ciñ / dus gźan du yañ tha sñad kyi gdams pa mi 'chad pa'i don du de la 'di ltar rjod byed dañ brjod bya dañ / śes pa dañ śes bya'i mtshan ñid can gyi don phyin ci log tsam gyis ñe bar bskyed pa'i bdag ñid kyi dños po la tha sñad ces brjod kyi / byed pa po'i tshogs pa gcig dañ 'brel pa ni ma yin no // de ñid kyañ 'jig rten pa bden par 'dod pa'i phyir 'jig rten pa'i tha sñad kyi bden pa źes bya ste gcig go // (ŚSV: p. 213 ll. 8-24)

(a) さて「何に對して、ここ(聖無盡意經)では、lokavyavahāra と言われているのか」というなら、まず、薪に依據した火の如く、蘊に依據して施設された「人」に對して「世間」と述べられている。それ(世間)はさらに、顛倒と非顛倒によって二種類存在する。そのうち、感官が損なわれ飛蚊症を有する者などが顛倒である。非顛倒とは、感官が損なわれていない者であり、飛蚊症などを有する者とは別である。他ならぬこれ(感官が損なわれていない者)が、ここ(聖無盡意經)で「世間」という言葉によって述べられており、もう一方(感官が損なわれている者)ではない。何故なら、他ならぬ(その様な感官が損なわれている)世間の者達にとって、形象は正しい認識手段ではないからである。(β)『lokavyavahāra』と説かれたことも、他人が理解したいと望む事物で、普く構想された諸々の事物を、別な心の相續に於いて認識することを働かしめることに對して「vyavahāra (慣習)」と述べられたのである。「lokavyavahāra」とは、世間が、その慣習を世間が理解することを望む意味の通りに相互に認識せしめ、或いは、知りたい意味を理解する如くに、その対象に關して「所詮・能詮という關係」と「所知・能知」として設定し、別の時にも慣習の教示を斷じないために、その時にこのように「所詮・能詮」と「所知・能知」という特徴をもつ対象で、顛倒のみによって生ぜしめられることを本質とする事柄に對して「慣習」と述べられるのであって、行爲主體という一集合體だけに關係するものではない<sup>15)</sup>。それはまた、世間が眞實であると認めているから世間の慣習の諦と述べられており、(世俗諦と)同一である。

まず (a) の部分で、Candrakīrti は [A] で示された世俗諦の特徴のうち「lokavyavahāra」について、感官に異状のない世間の人々の慣習と理解し、續く (β) の部分で、「lokavyavahāra」を「言葉」と「認識」という二側面から説明し、前者に關しては「所詮・能詮」、後者に關しては「所知・能知」と述べている。このように Candrakīrti が「lokavyavahāra」に關して「所知・能知」と「所

15) Erb 氏は「認識主體」だけではなく、「その対象」も世俗諦に含まれるという意味ではないかと述べている。Erb (1997) p. 126 n. 236 を参照。

詮・能詮」という二つの特徴を挙げるのに對し、既に確認した [SDVV] や [MAV] では「所知・能知」を示すのみで、「所詮・能詮」という言葉を特徴とするものは「文字云々によって説示されたもの」によって示されていると注釋しているのである。しかも、Jñānagarbha は、その言葉を特徴とするもの（所詮・能詮）は「lokavyavahāra」の特徴ではないとわざわざ述べることで、Candrakīrti と同様の主張を否定しているのである。

さらに [ŠSV] の後にも注釋は續くが、Candrakīrti は「文字云々によって説示されたもの」に関しては一言も觸れていない。恐らく Candrakīrti は ANST と同様に「世間の慣習」と「文字云々によって説示されたもの」とを一塊として理解していたために一方のみを詳しく注釋するだけでよいと考えたのではないだろうか。そしてそれ故に lokavyavahāra の特徴として所詮・能詮も挙げられているように思われる。實際、彼が ŠSV にて引用する [A] は唯識派が引用するものと類似しているのである。

[ŠSV-A] de skad du mdo las / kun rdzob kyi bden pa gañ ze na / ji srid du 'jig rten gyi tha sñad yi ge dañ skad kyis ston pa'o zes so // (ŠSV: p. 213 ll. 5-6)

その様に經典に「世俗諦とは何かというなら、文字・術語によって説示する全ての世間の慣習である」とある。

また、活躍年代が未確定である中觀派の論師 Avalokitavratā は『般若燈論注』(Prajñāpradīpa-tīkā: PPT) に於いて [A] を以下の様に引用している<sup>16)</sup>。

[PPT] 'Phags pa Blo gros mi zad pas bstan pa'i mdo las kyañ / kun rdzob kyi bden pa gañ ze na / ji tsam du 'jig rten gyi tha sñad du yi ge dañ sgra dañ brdas bstan pa'o // don dam pa'i bden pa gañ ze na / (omitted in P) gañ la sems kyi spyod pa yañ med na yi ge rnams kyi lta ci smos pa'o zes bden pa gñis mtshan ñid dañ bcas par bka' stsal pa dañ / (PPT: D. wa 17a2-3, P. wa 20b2-3)

『聖無盡意經』にも「世俗諦とは何かというなら、lokavyavahāra に於いて、文字や術語や記號によって説示される限りのものである。勝義諦は何かというなら、そこに於いて心が働くことも存在しないなら、文字などは何をかいわんや」と二諦が定義を伴って説かれており、

勿論これだけでは、彼が實際にどのように [A] を理解していたのかは判然としないが、このチベット語譯を見る限り、Avalokitavratā も Candrakīrti や唯識

派と同様に lokavyavahāra とは文字などによって説示されたものである、と理解しているように思われる。

この様に Jñānagarbha 以前に活躍した Candrakīrti や、活躍年代が未確定ではあるが Avalokitavratā など、[A] の世俗諦部分を引用する中觀派の一部の論師は、松本氏が指摘した唯識派と同様に「世俗諦は言語表現である」という理解を示しているのである。この事實に基づく時、二つの解釋の相違が唯識派と中觀派間の相違ではない可能性がある。

## 5. lokavyavahāra を巡る相違點の原因は何か？

この [A] を巡る二種類の解釋の相違は何故生じたのだろうか、その點を明らかにするために、これまで採り上げた各論書に引用される [A] の世俗諦部分を列挙してみる。

[SDVV-A] de la kun rdzob kyi bden pa gañ ze na / ji sñed 'jig rten gyi tha sñad gdags pa dañ / yi ge dañ skad dañ brda bstan pa dag go // (SDVV: p. 158 ll. 25-7). 翻譯者: Śilendrabodhi, Ye śes sde

[MAV-A] de la kun rdzob kyi bden pa gañ ze na / 'jig rten gyi tha sñad ji sñed pa dañ / yi ge dañ skad dañ brda bstan pa dag go // (MAV: p. 204 ll. 13-4). 翻譯者: Sūrendrabodhi, Ye śes sde

[MĀ-A] mdo las kun rdzob kyi bden pa gañ ze na / 'jig rten gyi tha sñad ji sñed yi ge dañ sgras bstan pa yin no (MĀ: D. sa 142a1-3, P. sa 153a6-8). 翻譯者: Śilendrabodhi, dPal brtsegs

[ŠSV-A] de skad du mdo las / kun rdzob kyi bden pa gañ ze na / ji srid du 'jig rten gyi tha sñad yi ge dañ skad kyis ston pa'o zes so // (ŠSV: p. 213 ll. 5-6). 翻譯者: Dharma grags, Abhayakara

[PPT-A] 'Phags pa Blo gros mi zad pas bstan pa'i mdo las kyañ / kun rdzob kyi bden pa gañ ze na / ji tsam du 'jig rten gyi tha sñad du yi ge dañ sgra dañ brdas bstan pa'o // (PPT: D. wa 17a2-3, P. wa 20b2-3). 翻譯者: Jñānagarbha, Klu'i rgyal mtshan

これらを比較する時、解釋の相違以前に、それぞれの論書に引用される [A] の譯語に見逃せない相違が存在することが分かる。即ち、SDVV や MAV 中の [A] では「'jig rten gyi tha sñad」と「yi ge」以下の部分を dañ で繋ぎ、句點に相當するシェー (/) を加えることによって、「lokavyavahāra」と「文字云々によって説示されたもの」が別の二つの要素であることを示している。一方、MĀ, ŠSV, PPT 中の [A] では「'jig rten gyi tha sñad」と「yi ge」との間に dañ もシェーも無く、全體を一塊とみなし「lokavyavahāra は文字云々によって説示されたもの全て」というほぼ共通した理解が成立しているのである。即ち、解釋の

16) Avalokitavratā の活躍年代については、おおよそ7世紀半ば頃と想定されている。『梵語佛典の研究III論書篇』p. 225 n. 38を参照。ただし異論もあり、Jñānagarbha に先行するかは未確定。

相違ではなくそもそも二種の [A] が存在した可能性があるのである。

では、どちらの [A] が ANS 本来のものだろうか。この問いに關して斷定的なことを言える状況にはないが、恐らく、元々唯識派などが引用するような讀みの [A] が存在し、後に、注釋者の理解を反映するかたちで、Jñānagarbha が引用するような讀みの [A] が生じたのではないかと考えられる。何故なら、活躍年代が未確定である Avalokitavrata に關しては若干問題が残るものの、700 年頃に活躍した Jñānagarbha が SDVV 中で引用した [A] を境に、その解釋の相違が明確になっていることが見てとれるからである。加えて、Jñānagarbha 以降に活躍した Śāntarākṣita や Kamalaśīla は Jñānagarbha と同じ [A] を提示すると同時に、ANST などに引用されるような [A] に關してもそれぞれの論書に於いてははっきりと言及し、否定しているが<sup>17)</sup>、Dharmapāla や Candrakīrti など Jñānagarbha に先行する論師達は自らの [A] を提示するのみで、Jñānagarbha などが引用するような [A] に全く言及していないからである。これは、中觀派、唯識派を問わず、Jñānagarbha 以前の論師達が、自らが引用するような [A] しか知らなかったことを意味していると考えられる。もし異なる二系統の [A] が存在していたならば、Jñānagarbha に先行する論師達が誰一人として自らの引用する [A] と讀みの異なる別の [A] に關して全く言及していないのは奇妙であろう。それ故に Jñānagarbha 以前の論師達が引用するような [A] が本来の ANS の一節であり、恐らくは Jñānagarbha によって恣意的に、或いは偶然に改変された可能性が考えられるのである<sup>18)</sup>。

では、その様な改変はどのように生じたのであろうか。その点を明らかにする

17) Jñānagarbha が [SDVV] で、Dharmapāla や Candrakīrti の理解と同様のものを否定していることは既に指摘したが、これは Jñānagarbha が自らと異なる [A] の存在を認識していた可能性を示している。また、Śāntarākṣita は SDVP に於いて、唯識派が引用するのと同じ [A] の存在を指摘し批判している。(gal te kha cig 'di skad du gzugs la sogs pa dañ / bde ba la sogs pa so so rañ gis gnas pa gañ dag yin pa de dag ni don so sor nes pa'i rnam pa'i tshig gis rig pa ma yin te / de dag ni ñag gi lam las 'das pas kun rdzob kyi bden pa ma yin te / de ni tha sñad gdags pa yin pa'i phyir te / 'di ltar mdo las de la kun rdzob kyi bden pa gang že na / 'jig rten gyi tha sñad gdags pa / yi ge dañ skad dañ brda[s] bstan pa ji sñed pa dag go zes gsuñs pa'i phyir ro // SDVP: D. sa 22b6-23a1, P. sa 11a5-7)。さらに Kamalaśīla は MAP に於いても、この唯識派などの解釋と一致する [A] を誤ったものとして採り上げている (yañ ci'i phyir 'jig rten gyi tha sñad yi ge dañ skad bstan pa ji sñed pa'i bdag ñid ces bya ba kho nar tshig gcig tu mi šes sñam pa la / MAP: p. 207 ll. 19-20)。

18) 北涼時代 (397-439) に翻譯された ANS の漢譯 (『大集經無盡意菩薩會』) でも、唯識派などが引用するような [A] が示されている。『云何俗諦。若世間所用語言文字假名法等。云何第一義諦。乃至無有心行。』(T. 13 no. 397 vol. 28, p. 197b8-9)。

ために、[A] の世俗諦部分のサンスクリットを考えてみる必要があるが、實は既に ANS の校訂テキストと英譯を行った Braarvig 氏によって Jñānagarbha が SDVV に於いて示したものと同じ讀みでのサンスクリットが次の様に想定されているのである。

\*(tatra katamat samvṛtisatyam) lokavyavahāro yāvad akṣaraśabdasaṃketanirdiṣṭam<sup>19)</sup>

ここで、Braarvig 氏は 'jig rten gyi tha sñad というチベット語に對し lokavyavahāra というサンスクリットを想定している。同じ想定は松本史朗氏や、ŚSV の第 1~14 偈までの校訂テキストと獨譯を出版した Erb 氏によっても示されている<sup>20)</sup>。一方、SDVV の校訂テキストと英譯を出版した Eckel 氏は、lokaprāñapti というサンスクリットを想定している<sup>21)</sup>。tha sñad というチベット語に對しては、幾つかの文獻に於いて vyavahāra というサンスクリットを實際に確認できることから、最初の三氏の想定は妥当であると言える。一方 Eckel 氏が提示した prāñapti という想定サンスクリットは、少なくとも辭書にはその根拠を見出せない。それにも関わらず Eckel 氏が prāñapti と還梵したのは、恐らく [A] 中の 'jig rten gyi tha sñad という表現が [SDVV] に於いて 'jig rten gyi tha sñad gdags pa となっていることに起因していると思われる<sup>22)</sup>。ただし、[A] の原文では lokavyavahāra であったと想定する方が妥当であろう<sup>23)</sup>。その根拠として、まず lokaprāñapti という表現を現段階で他の文獻中に見出せていないことが挙げられる。さらに、[A] に於いても 'jig rten gyi tha snyad というチベット語譯が用いられていることに加え、筆者が調べた限り、SDVV と同様に 'jig rten gyi tha sñad gdags pa という譯語を用いるのは、Śāntarākṣita による SDVV に對する注釋書『二諦分別論細疏』(Satyadvayavibhāṅga-pañjikā: SDVP) だけだからである<sup>24)</sup>。

19) Braarvig (1993a) p. 269 ll. 6-7. 或いは yāvanto 'kṣaraśabdasaṃketanirdiṣṭaḥ と想定することも可能か。

20) 松本 (1978) p. 114 l. 3, Erb (1997) p. 38 l. 5.

21) Eckel (1987) p. 74 l. 7.

22) 『明句論』(Prasannapadā: PrasP) 中の prāñapti という表現に tha sñad gdags pa という譯語が當てられている例を見出せる (PrasP: p. 193 l. 6; D. ḥa 65b5, P. ḥa 75a3)。

23) 'jig rten gyi tha sñad と 'jig rten gyi tha sñad gdags pa という両者に lokasaṃjñā という共通のサンスクリットを想定することも可能である。Mvyt (no. 6558) 参照。ただし、現在段階でその例を實際の文獻中に見出せていない。また、tha snyad gdags pa という譯語に對するサンスクリットとして vyavahāraprāñapti という表現も見出される。TSD (p. 1010) 参照。

24) 同じ Śāntarākṣita が MAV 中で引用する [A] は gdags pa を欠いている。

さて、以上の主張が正しければ、[A] は Jñānagarbha 以前の論師達が引用するものと同じでなければおかしいが、本稿で挙げた [A] を見て分かる通り、Braarvig 氏の校訂テキストは Jñānagarbha などが引用したのと同様の読みの [A] を挙げており、これまでの考察と矛盾する。ところが、この [A] はチベット大藏經主要四版全てに見出されることから、同氏が採用したものにすぎず、チベット大藏經トクパレス版と川口慧海將來本(東洋文庫所蔵)には、唯識派が引用するものとほぼ同じ [A] が見出され、必ずしも同氏が校訂テキストで採用した読みが [A] の唯一のものではないのである<sup>25)</sup>。そこで Candrakīrti, Avalokitavratā, 唯識派などが引用する [A] に基づきサンスクリットを想定するならば、恐らく次の様になるだろう。

\* (tatra katamat samvṛtisatyam) lokavyavahāro yāvad akṣaraśa-bdasamketanirdiṣṭaḥ

この想定サンスクリットを SDVV や MAV の解釋に基づいた先程の想定サンスクリットと比べてみると、その違いは最後の語尾が中性形 (-m) で終わるか、男性形 (-h) で終わるかの差であることが分かる。つまり、本来の [A] では語尾が男性形であり、MĀ, ŚSV, PPT などに見出されるような意味を構成する文であったが、それを Jñānagarbha が無意識か、意圖的かは確定できないが、この語尾を中性形で読み替え、SDVV, MAV のような解釋が生じたと考えられるのである<sup>26)</sup>。そして Jñānagarbha がこのような読み替えを行った理由は「直接知覚という無分別知も世俗諦である」と主張する Jñānagarbha にとって、二諦説の教證として用いられる [A] の本来の読みが不都合だったためではないだろうか<sup>27)</sup>。

さて、最後にこの二つの読みが ANST の翻譯にもたらした興味深い点を指摘して議論を終えたい。既に確認したとおり、ANST に示された解釋が MĀ, ŚSV, PPT などに示されたものと同じであるにも関わらず、ANST 中に引用される [A] の世俗諦部分の譯語は SDVV, MAV などに示されたものと同じなのである<sup>28)</sup>。つまり ANST に引用された [A] のチベット語譯と、注釋された内容が

[MAV-A] 参照。

- 25) Braarvig 氏によると、この二版の [A] は次のとおり。「ji sñad du 'jig rten gyi tha sñad yi ge dañ sgra dañ brdas bstan pa'o //」(Braarvig (1993) p. 74 n. 15).
- 26) 寫本の状態にもよるが、男性形と中性形とを読み違えたとは考え難く、Jñānagarbha が意圖的に読み替えた可能性が高い。勿論、現段階では彼以前にこの読みを行った人物の存在も否定し得ない。
- 27) 以上の考察が正しければ、Jñānagarbha の [A] を知らない Avalokitavratā は、Jñānagarbha 以前の人物である可能性がある。少なくとも、彼は Jñānagarbha の SDVV を知らなかったと考えられる。

一致していないのである。翻譯にこのような矛盾が起こっているのは、チベットへの佛教導入に大きな役割を果たした Śāntaraksita や Kamalāsīla の影響下、彼らの理解が妥當な解釋とされ、[A] の譯が彼らの理解に添って行われたにも関わらず、ANST の注釋部分が本来の [A] の内容を注釋したままであるためであると考えられるのである。

## 6. まとめ

1. 本来の [A] は現存する ANS のチベット大藏經主要四版の様なものではなく、唯識派や Jñānagarbha 以前の中觀派の論師である Candrakīrti、活躍年代不詳である Avalokitavratā が引用するように、世俗諦とは言語表現であるという理解を示すものであった。しかし Jñānagarbha が元々のサンスクリットの語尾を男性形から中性形へと読み替えた(或いは読み違えた)ことによって、世俗諦とは「世間の慣習」と「文字・術語・記號によって説示されたもの」という二つを特徴として有するものへと變化した。そして現存する大藏經主要四版中の [A] もその解釋に従ったチベット語譯が行われた可能性がある。

2. 故に、この lokavyavahāra を巡る解釋の相違は、從來知られている中觀派と唯識派の解釋の相違ではなく、Jñānagarbha を基點に變化した、と考えるべきである。

3. Jñānagarbha の [A] の世俗諦を巡る注釋([SDVV])では、Dharmapāla 批判だけでなく、Candrakīrti の ŚSV に示された [A] に関する注釋内容の修正を意圖した可能性がある<sup>29)</sup>。

ANS 中の lokavyavahāra 解釋を巡るこのような事實に基づくならば、Jñānagarbha は世俗諦の定義の轉換に関して重要な役割を果たした人物であると言えるであろう。

## 略記號

ANS: *Ārya-Akṣayamatīnirdeśasūtra*, ANST: *Ārya-Akṣayamatīnirdeśasūtra-ṭīkā*, D.: sDe dge edition, MĀ: *Madhyamakāloka*, MAP: *Madhyamakālamkāra-panjikā*, MAV: *Madhyamakālamkāra-vṛtti*, MMK: *Mūlamadhyamaka-kārikā*, Mvyt: *Mahāvvyutpatti*, P.: Peking edition, PPT: *Prajñāpradīpa-ṭīkā*, PrasP: *Prasannapadā*, SDVP: *Satyadvayavibhaṅga-panjikā*, SDVV: *Satyadvayavibhaṅga-vṛtti*, ŚSV: *Sūnyatāsaptati-vṛtti*, T: 大正大藏經, TSD: Tibetan Sanskrit Dictionary

28) 前述の [ANST] を参照。

29) Jñānagarbha は Candrakīrti を批判したわけではなく、思想の發展の過程で、Candrakīrti など他の中觀派の論師が主張してきたそれまでの思想を一部修正する必要に迫られたということであろう。

## 一次資料

*Ārya-Akṣayamatīnirdeśasūtra*: Braarvig J. (1993).; *Ārya-Akṣayamatīnirdeśasūtra-tīkā* by Vasubandhu : Braarvig J. (1993a).; *dKar chag 'Phang thang ma*: Kawagoe, E. (2005); *Prajñāpradīpa-tīkā* by Avalokitavratā: D. (3859) *wa* 1-287a7 *za* 1-338a7 *za* 1-341a7, P. (5259) *wa* 1-333a6 *za* 1-394a5 *za* 1-406a8.; *Prasannapadā* by Candrakīrti: La Vallée Poussin (1903-1913). *Madhyamakālaṃkāra-pañjikā* by Kamalaśīla: 一郷 (1985); *Madhyamakālaṃkāra-vṛtti* by Śāntarakṣita: 一郷 (1985); *Madhyamakāloka* by Kamalaśīla: D. (3887) *sa* 133b4-244a7, P. (5287) *sa* 143b2-275a4; *Satyadvayavibhaṅga-pañjikā* by Śāntarakṣita: D. (3883) *sa* 15b2-52b7, P. (5283) *sa* 1-48b7; *Satyadvayavibhaṅga-vṛtti* by Jñānagarbha: Eckel, M. D. (1987); *Sūnyatāsaptati-vṛtti* (kk°1-14) by Candrakīrti: Erb (1997).; 『大集經無盡意菩薩會』 in 『大集經』: T. 13 no. 397 vol. 27-30, pp. 184-213. (翻譯 智嚴・寶雲).; 『大乘廣百論釋論』 by 護法 (Dharmapāla): T. 30 no. 1571, pp. 187-250 (翻譯: 玄奘)

## 参考文献

- Braarvig, J. (1993): *Ārya-Akṣayamatīnirdeśasūtra volume I*, Solum Forlag, Oslo.; (1993a): *Ārya-Akṣayamatīnirdeśasūtra volume II*, Solum Forlag, Oslo.
- Eckel, M. D. (1987): *Jñānagarbha's commentary on the distinction between the two truths*, — *An Eighth Century Handbook of Madhyamaka Philosophy*, State University of New York Press, New York.
- Erb, F. (1997): *Sūnyatāsaptatī-vṛtti: Candrakīrtis Kommentar zu den "Siebzig Versen über die Leerheit" des Nāgārjuna [Kārikās 1-14]: Einleitung, Übersetzung, textkritische Ausgabe des Tibetischen und Indizes*, Tibetan and Indo-Tibetan studies 6, Franz Steiner Verlag, Stuttgart.
- Lalou, M. (1953): "Les textes bouddhiques au temps du roi Khri-sroñ-lde-bcan", *Journal asiatique* 241, pp. 313-353.
- La Vallée Poussin (1903-1913): *Mūlamadhyamakakārikās (Madhyamikasūtras) de Nāgārjuna avec la Prasannapadā Commentaire de Candrakīrti* (Bibliotheca Buddhica 4).
- 赤羽律 (2003): 「年代確定の指標としての avicāraikaramaṇiya」『南都佛教』第 83 号, pp. (33)-(59).
- (2006): "On the Interpretations of *Ārya Akṣayamatīnirdeśasūtra*", *Humaniora Kiotoenia — On the Centenary of Kyoto Humanities*, pp. 215-227.
- 一郷正道 (1985): *Madhyamakālaṃkāra*, Bun'eido.
- 梶山雄一 (1995): 「中觀思想の歴史と文獻」『講座大乘佛教第 7 卷中觀思想』春秋社.
- 川越英眞 (Kawagoe, E) (2005): *dKar chag 'Phang thang ma*, 東北インド・チベット研究会.
- 松本史朗 (1978): 「Jñānagarbha の二諦説」『佛教學』5, pp. 109-137.
- (1980): 「佛教論理學派の二諦説 (上)」『南都佛教』45, pp. 101-118.;
- (1981): 「同 (中)」『同』46, pp. 38-54.

## バイエルン州立図書館所蔵 Cod. pers. 431 寫本をめぐる

— 書寫奥書署名 "Ismā'il b. Ḥaydar al-Ḥusayni" とは誰か? —

守 川 知 子

はじめに

ミュンヘンのバイエルン州立図書館 (Bayerische Staatsbibliothek) には、わずかな葉数からなる一つの寫本が、研究者の間で全く知られることなく眠っている。この寫本は、同館寫本・貴重書室による手書きの寫本目録 (補遺)<sup>1)</sup>において、「Kalligraphie von Shah Ismail I」として登録されている。寫本番號は Cod. pers. 431。

上述の目録は、寫本の登録番號順に各々數行の説明が付された覺書程度の非常に簡素なものであるが、それによると Cod. pers. 431 は、1959 年にイスタンブルで Ertaylan 教授<sup>2)</sup>より購入され、「シャー・イスマーイール 1 世のカリグラフィ、11 葉、920 = 1514 年書寫、ページの欄外に様々な色」とある。しかしこの一行の説明以外、寫本の形態・内容・來歴等詳細については何ら觸れられていない。

Cod. pers. 431 は、「シャー・イスマーイール 1 世のカリグラフィ」と目録作成者によって明記されているにもかかわらず、これまで半世紀の間、研究者の注意を惹くことはなく、公に検討されることはなかった。2002 年秋に筆者は同図書館を訪れ、目録を通じてこの寫本を発見した。が、たとえ「シャー・イスマーイールの書」と伝えられたところで、すぐに納得し得る状況ではなかった。それは、數多あるイスマーイールの事績に関する先行研究において、寫本制作や書道を嗜むといった彼個人の文化的側面が語られることは殆どなかったことに加え、同寫本の存在に言及した研究者はこれまで誰一人としていなかったからである。さらに Cod. pers. 431 寫本がイスマーイールの書とされる根拠が目録上では何ら

1) Codices Orientales Suppl. アラビア語、ヘブライ語等 38 言語、總數 3174 點の寫本に関する簡素な覺書を集め、1972 年に冊子體にまとめられた。未公開。

2) İsmail Hikmet Ertaylan (1889-1967)。トルコの文學者。同時期に氏から購入された寫本は、アラビア語・ベルシア語など 24 點を數える。1~20 數葉の小品が多い。